

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	剣道部々報 : 部報
Author(s)	
Citation	龍南, 243 : 96 - 101
Issue date	1939-03-03
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7534
Right	

× × ×
 春期辯論大會

劍道部々報

一、吾が社會組織と文化の方向

文三甲三 秋田 博正

二、所感

文三乙 松岡 卓

一、感想

文一甲二 末武 武夫

一、部生活

文三甲一 池口 敏郎

一、高校生活の反省

文三乙 久保 政

一、自由主義と自我

理二乙 瀬上 安正

一、言語の世界

文三甲三 中原 信吉

秋季 大會

一、感想

理一乙 田代 友僊

一、自由と課題

文三乙 弘津 正二

一、情熱の缺亡

文三甲一 田部 健

一、新日本文化の方向

文二 中島 信之

一、草莽の青年の心

文三乙 脇島 稔治

三高辯論大會

一、革新

文三乙 久保 政

一、方向

文二乙 中島 信之

我劍道部の過去十二年の歴史は慘澹たる敗北の血涙史であつた。幾度か紫紺の大旗は我等が手に歸せんとしては又遠いて行つた。

殊に昭和三年と昭和十一年の二度は共に共に優勝戦に臨み大將同志の一本一本に迄至り、我も人も共に優勝を許し乍らも一步の差にて長蛇を逸した恨みは今尚吾等が胸奥に新なる所である。

四年世紀の歳を持つ京大主催全國高專劍道大會に於て吾々の先人は最も輝しい歴史を残して呉れた。第一回、第三回、第六回と殆んど全國群雄中比を見ざる意氣と傳統とによつて全國制覇を完うし、最後に大正十五年第十四回大會にて四度び凱歌を肥後の天地に響かせた。

そして「五度び制覇」——之がその時以來、濟美館裏に衆ふ若人の常に變らざる目標となつた。

だが来る年も来る年も雄圖は空しく破れ、加茂川邊の星月夜に、悲憤の誓ひを新に固めるのみだつた。「四度び勝ち得し優勝の榮光去りて幾歳ぞ、」雪辱行を唱して進む部

員の體軀に溢るゝ悲憤の熱情は心ありて聞く人々の胸には
凄壯な感じを起さずには止まなかつたであらう。

だが遂に吾等は勝つた。過去十二年の血涙は遂に空しき
まゝには終らなかつた。全國群雄を駕御し、前人未踏の五
度制覇は先づ龍南健兒の手にて完成された。

一には吾等が先人の火の様な激勵と、一には全龍南人の
燃ゆるか如き聲援とによりて今、劍道部々史に又龍南の歴
史に新しい榮光の一頁を加ふる得をたことを謙虛な心で
感謝したい。

そして未だ霸業ならず來る年の雪辱を目指して黙々たる
精進を續けて居る、龍南各部の部員諸兄に對し來ん年の優
勝を切に祈ると共に吾等も亦兎の緒を弛むことなく六度び
凱歌を龍田下に擧げんことを誓ふ。

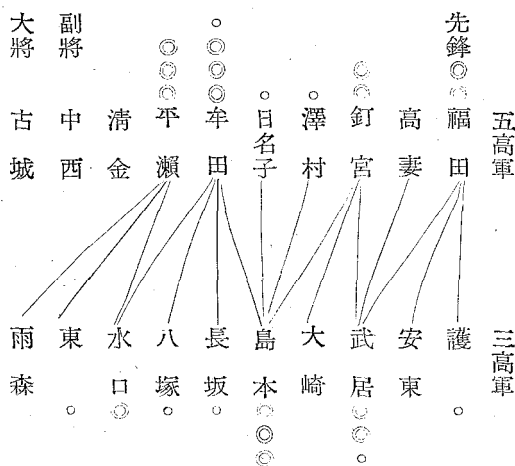
次に本年度戰績報告。

七月十九日、第一回戰三高と組む。

敵も名にも負ふ、三高、歴史と傳統の古きに於て共に甲
乙なく、高校獨特の意氣と熱とを以て戰へば、又豫測し難
き好試合ならんと思はる。

先づ先鋒福田二人を倒し善戰續いて高妻前日迄二刀を使

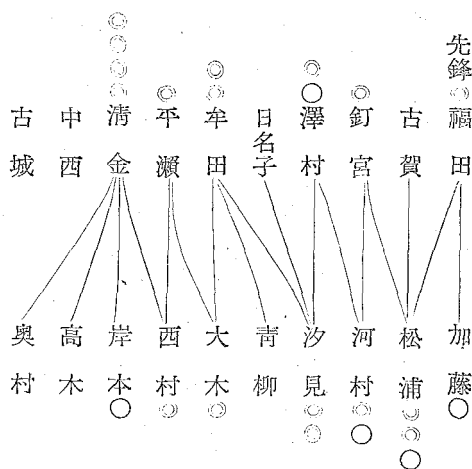
つてゐたものを急に一刀で戰つた爲、惜しくも敗れ、釘宮
健闘、至寶牟田、兩刀を以て中堅を薙ぎ、平瀨續いて残り
を切る。副將東強しの風評有つたが、平瀨の巨軀に寄らは



足がらみで倒され、後頭を打つこと兩三度、なす所なくし
て破れ、大將雨森平瀨の美事な逆胴に怨をのむ。かくて一
回戰は全く二、一年のみにて勝つ。先づ三高が血祭りに上
つた。

の美事に討取りてあつけない位にて勝つ。

五高 姫高



かくて決勝戦に進む。

99
敵は六高。不足のない敵。而も昨夏のこの大會では、第一次戦で組みて敗れ、綿々たる恨は盡きずあの斷腸の思は皮下一分をかけ巡つてゐる。是が非でも勝たねばならぬ一戦。去年の雪辱戦だ。再び敗るゝことあらば何の顔せあつてか故山に歸らん。

然も去年の優勝校であつて依然として強し。

二年連勝を夢みてゐる六高を叩切らねば止まぬ。特に苦杯をなめ盡してゐる三年の選士の心や悲壯なものがあつたらう。

全國の先輩からの激電が飛ぶ。過去十二年の忍苦今ぞ報ひらるゝか、或は屈辱に泣くか。

運命は一瞬にして決せられんとし機は刻々に熟す。

午後一時より開始

福田例によつて健實に戦ひ、先づ先鋒を倒す。今迄の戦ひに於て先鋒として出て未だ敗れたことなく必ず幾人かを倒す確實さはその人の如く着實な剣によるものであらうが實に名先鋒と言ふべし。續て都留初陣にも拘らず、悠揚迫らず一人を刺す。釘宮又變化に富みて前田迄確實に切り進んで來たが、油の乗つた池田に籠手を取り乍らも退く。次に澤村肥後特有の負けじ魂で終始押しつゝも惜しくも破らる。續て闘將日名子、前田の不振を回復してよく中堅を難くも逆二邊兒山に切らる。代つて大會隨一の折紙の付いた、二刀牟田立ちて兒山と對す。兒山亦逆二刀で二刀同志の試合。過ぐる五月の九州四高校大會で牟田七高を先鋒よ

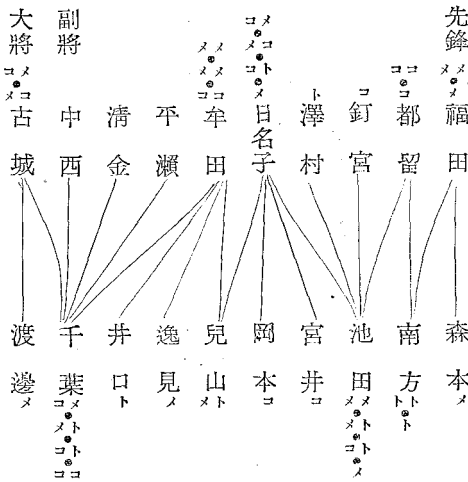
り七人撫で切りにしたるも八人目の逆二刀に名をなさしめた経験ある故、用心を重ね居ると共に、二刀同志の試合は研究すみ。よく小刀の籠手をねらひ、派立にきまる。次に

決勝戦

審判 小川 範士
月岡 委員

五高

六高



逸見を切り井口に至り、見事な飛込み胴をとられ乍らも之を退け、千葉に對す。

千葉六高隨一の剛將丈あつて牟田二本續けて取られ、平瀨立つ。十九貫の巨軀を利しての足がらみと、得意の逆胴は敵をして心膽を寒からしめたるも已にて之を刺止めんとあせつたのか、遂に一太刀を報ひずして破る。前姫高戰の鬨將清金、免倒と見たか、再び前回の右上段にて奇襲に出でんとするも皆決らず。愈々副將中西出陣し、堂々攻むるも焦り氣味、動いたと思ふ瞬間飛び込む、敵の劍尖に惜しくも制せらる。遂に大將古城立つ。之が勝敗のけじめ、焦りたる様はなきか、責任感に固くなつては居ぬかと案じつゝ見るもその様子なし。由來千葉は、後の先^ゴを得意とし自らは動かず、敵の切り込んで來ると見るや、間髪を容れず、その動き初めの隙に切り込んで行く曲者にして平瀨中西の正攻法では殆ど倒し難い。それと見てか古城徐に竹刀を右に伸し、切ると見せて、敵直に反撃し來るを見事裏をかきて籠手を切る。美事に決る。この戦法ならずしては千葉は切れなかつたらう。

最後に大將渡邊立つ。小兵なれど一軍の將。千葉倒れし時既に「我軍勝てり」とは思つたものゝ試合は終局に至るまでは以外の變化を來すもの故、夏の暑きも忘れ固唾をの

む。敵も味方も満堂の人の視線は、二本の剣尖と共に躍る。先づ古城龍手、先取、續て渡邊面を返す。一喜一憂交々來り、劍尖の一上一落する毎に、正面に飾られた紫紺の大旆、或は近づき或は遠のく。やがて、渡邊、面に飛込んで來た。古城すゝと身を引きつつ劍を振り上げ飛び上つて面を切り返す。眞向面上を割られて敵遂に涙をのむ。古城得意中の得意の外し面。遂に吾等は優勝した。眼をつぶればあの最後の一本を打ちし彼の姿あり／＼と眼底に浮ぶ。嗚呼！覇業はなつた。

今吾等は輝ける傳統を傷けざりしことを喜ぶのみ。そして直接間接に我等を力づけ、勵まして頂いた全ての人々に深甚の感謝を表します。

各部東征の跡を顧みて

總務委員 上野 四郎

世利君病に癒れ、小生も亦健康勝れず欠席がちにて事務上多大の障碍の生じたるを深く遺憾に思ふ次第である。されど諸賢の努力と總務幹事諸兄の献身的努力により今日ま

で、過し來りし事を深く感謝す。

ラグビーサッカーを除ける各部の十三年度總決算も終り諸賢の胸裏に往來するもの、或は榮ある勝利の極、或は敗慘の苦酒。然るに諸氏思を炎天下の京洛に驅するとき、諸氏の胸に勝利以上の何物かあらう。曰く堂々の五高スピリット。

最後に目指すは全國制覇なり。苦節の一年各部とも「禁酒、禁煙」の下に精進されし事と思ふ。靜に過去を振かへるときに諸氏は何を得るか。嚴として立てる部則。若人の血氣に鐵則とまでは行かぬだらう。されど部員一同團結して心を一にせる合宿生活、各部員が一切に部則の中に生活せる中に不幸小生は統御にある者、自ら禁止事項を定めし者のある者が率先禁を犯せるを目のあたりに見て、しばし杳然たるを得なかつた。勿論試合を前にしてでなく三月の合宿であつた。何の爲の酒禁禁煙ぞ。靜に反省すれば足りるだらう。

劍道部の全國制覇に對しては滿腔の感謝と心からなる祝詞を敢て惜まぬものである。ローマーは一日にして成れるものに非ず。部員一同の精進の賜なるは勿論、今日まで樂